森の民の生態と自然観 アフリカ、ムブティ・ピグミーの事例から

Ecology and a View of Nature of the Mbuti Pygmies in the African Forest

市川光雄 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科 〒606-8501 京都市左京区
Mitsuo ICHIKAWA Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto
University, Sakyou-ku, Kyoto 606-8501, Japan

ABSTRACT Environmental revisionists see the local landscape as a product of centuries-long interaction between man and nature. Based on this standpoint, examined in this essay is the ecological and ideological relationship of the Mbuti hunter-gatherers of the Congo Basin with the forest world.

While human activities are generally thought to be destructive to the environment from a conventional Western viewpoint, an examination of the Mbuti case indicates that they also impose positive impacts on the forest environment. A preliminary analysis of their use of forest and its resources suggests that their habitation and activities in the forest may have contributed to the maintenance of the forest resource base, rather than deteriorating it, and that they comprise a part of a large recycling system of the forest world.

The "circulation in the forest", or "continuity with the forest", shown in the ecological sphere is also represented in their view of the forest. The Mbuti view the forest as a womb, as the place where they come from, and also as the place where they go after the death. Their hunting is not merely a food-procuring activities, but also the process through which they confirm the continuity with the forest world. Such a life deeply incorporated into the forest ecosystem and the view of nature deriving from it show a marked contrast with the Western idea of the forest, which is based on dualistic opposition between man and nature.

Key words: environmental revisionism / hunter-gatherers / resource use / positive human impacts / recycling system / continuity with the forest. (環境リヴィジニズム / 狩猟採集民資源利用 / 肯定的インパクト / 循環システム / 自然との連続性)

歴史生態学への関心

1. Revisionism : 「孤立した未開社会」の見直し

近年、人類学の分野で「未開社会」や「伝統文化」の概念に関する批判が相次いでいる。これまでの民族誌においては、いわゆる「伝統的な」社会や文化が記述の単位になっていたのであるが、それらを他の社会や文化、あるいはそれらを含むマクロシステムとその動態から切り離して、あたかもそれ自体で存在する実体として扱うことが問題だというのである。たとえば、従来の民族誌の対象とされた社会は、レヴィ＝ストロース (1976) の言う「冷たい社会」として、きわめて静態的に描かれることが多かった。そうした社会に、かりに小さな変化が生じて、それらはやがて静態的な構造の中に吸収され、解消してしまい、小さな変化が累積して大きな社会変動を

ひきおこすことはないと考えられていた。いうならばこれらの社会は、歴史や変化から取り残された社会としてイメージされてきたのである。

しかし近年の歴史民族学的研究によって、外界から「隔離」されていたはずの社会が意外に古くから「外部社会」と接触しており、「伝統的」と考えられてきた現象が実はさまざまな異文化やマクロシステムとの接触を通じて形成されたり、変容したものであることが明らかにされている。いっけん「伝統的」とみえる社会や文化も、そうした接触と変容の結果、現在のような姿をとるに至ったのであって、このような歴史的視点をもってみれば、静態的にみえる文化や社会の動的な実像が明らかになるはずだというわけである。こうした観点から、いわゆる「未開社会」の見直し作業が、これまで外界から孤立してきたようにみえる地球上の辺鄙な社会に関しても進められるようになってきた。

たとえば、南アフリカ・カラハリ砂漠の狩猟採集民であるサン（ブッシュマン）も、かつては旧石器時代さながらの生活を残していると考えられてきた。農耕にはおよそ不向きな半砂漠の中で外界から隔離され、「生きた化石」のような生活を送っている人びと、というのが一般に流布されたイメージであった。とくに1960年代後半から70年代にかけては、彼らの生活を手がかりに初期人類の生活復原を試みるといった進化史的研究が盛んにおこわれた。人類進化を考える手がかりとして現生の狩猟採集生活を使うこと自体が、必ずしもそれを旧石器時代の残存と考えることを意味するわけではない。しかし、この種の研究が繰り返されたことによって、「狩猟採集生活」イコール「旧石器時代の生活様式」というステレオタイプ化が助長されたことは否定できない。

ところが近年の研究によると、彼らはすでに前期鉄器時代の紀元千年紀から、この地域に移住してきた農耕・牧畜民と密接な相互関係を形成していたことが判明している。そうした他集団と長いあいだ共存関係を保ちつつ、彼らは狩猟採集生活をつづけてきたわけである。なかには、現在は狩猟採集生活を送っているが、100年足らず前には自分たちの家畜をもっていたという集団もあった。100年前前といえば、南部アフリカ一帯にヨーロッパ人の入植が進み、商品経済や大規模な農牧業生産の影響がカラハリ砂漠にまで浸透しはじめた頃である。その過程で、それまで家畜をもっていたサンが急速に無産化していったと言われている（Wilmsen, 1985）。つまりこの場合には、彼らは、比較的近年になってから外的要因によって家畜を失い、あらためて「狩猟採集民化」したことになる。

こうした見方は、リヴィジョニスト（見直し論者）と呼ばれる人たちのものであるが、それによると「未開」とされる社会は、けっして過去の残存などではなく、それ自体が現代社会の産物である。つまり、それらが未開に見えるのは、現代において支配的なシステムの中で「未開化」された結果だというのである。このような見解が、ウォーラーシュタイン（1974）によって精緻化された「世界システム論」に依拠していることは明らかであろう。つまり、先進産業社会もいわゆる「未開社会」も同じ一つの世界システムに属しており、その中でそれぞれが相関的に先進化したり、未開化されてきたというわけである。いずれにせよ、リヴィジョニストの指摘が、これまで「歴史」や「文明」の蚊帳の外に置かれていた「孤立した未開社会」の再検討を促すものであることはまちがいない。

2. 自然景観の見直し＝Environmental Revisionism

最近、人類学におけるリヴィジョニズムの動きと呼応するように、地域の「景観」に対する再解釈の動きがみられるようになってきた。現在、主として地球大気や生物多様性の保全というグローバルな問題意識から、とくに熱帯林の保護に対する関心が高まっている。しかし、われわれ

が目にする森林のなかには、いっけん原生的な状態で残っているようにみえるものであっても、実は何世紀にもわたる自然と人為の相互作用の結果として形成されたものが多い。こうした認識は、「人為から隔離された自然」の再検討を迫るもので、いわば「環境見直し論 (Environmental Revisionism)」と呼んでもよからう。

注目すべきことは、人為の影響が必ずしも悪い方向の自然の改変をもたらすとはかぎらないという点である。とくに最近では、環境にとって肯定的な人為的影響の例がたくさん報告されている。たとえば、西アフリカの森林とサバンナの境界に分布する「森の島 (forest island)」と呼ばれる森林植生がその良い例である。西アフリカの広大なグラスランドの中に点々と分布するこれらの森林は、だいたい直径が 1-2 km² の丸い形をしており、それぞれの中にちょうど臍のような小さな村がある。これらの森林パッチは、初期の植民地時代から行政担当者や科学者によって注目されていた。それらは、かつてはこの地域を覆いつくしていた広大な森林の最後のレリックであり、住民の焼き畑や放火による破壊をかわり免れて今日まで残ってきたものとされてきた。つまり、この地域の景観は、「人為的なサバンナ化」の過程にあるものと決めつけられてきた。そして、地球環境問題への関心が急速に高まるなかで、この「取り残された森林」のリハビリが国際的援助の対象になってきたのである。

しかし、イギリスの人類学者のフェアヘッドとリーチ (Fairhead and Leach, 1996) は、この地域を詳しく調査した結果、従来の考えとは反対の結論に達した。すなわち、彼らは、過去の写真や文書、現地住民の伝承などから、人間の居住によって森林面積は逆に増加していることを示した。1950 年代の航空写真と最近の衛星画像を比較すると、森林面積がはっきりと増加していることがわかった。しかもふつう、人口の増加は植生の破壊につながると考えられているが、この地域ではまったく逆の傾向が現れていた。つまり、人口密度が高いほど森林面積の割合が大きくなっているのである。さらに彼らは、現地住民が実際に、さまざまな日常活動を通して土地を肥沃化するとともに、野火をコントロールして草地化を防いだり、休閑地を森に変えたりしていることを明らかにした。そういうことがこれまで明らかにならなかったのは、彼らがヨーロッパの研究者が考えるような植生管理を意図的にやっていなかっただけのことである。こうして彼らは、「アフリカ景観の読み違い (Misreading the African Landscape)」という刺激的な本の中で、従来の科学者や行政担当者による景観の読み違いを指摘するとともに、それに基づいた従来の保護政策を批判したのである。西アフリカから中央アフリカにかけてのサバンナと森林の移行帯では、このギニアの「森の島」と同じような景観がみられる地域があるが、これらも人為によって維持された森林という観点から再検討してみる必要があろう。

森と人の共存世界

1. 西欧的自然観

どうしてこのような「景観の読み違い」が起きることになったのか。おそらく西欧から来た研究者や植民地行政官は、いったん人為の手が加わった環境では、人間が自然に積極的に働きかけることだけが、植生の維持を可能にすると考えていたのであろう。そのため、「明確に意図的な植生管理」が見られなかったこの地域で、住民の日常活動の肯定的な影響を評価することができなかった。いいかえれば彼らには、地域住民の非意図的な環境維持活動や、社会的プラクシスの形をとって行われる環境への働きかけが見えなかったのである。さらに重要なことは、人間の活動はともかく植生に悪影響を及ぼすものだという先入観に彼らがとらわれていたことである。西欧の科学者や森林行政官にとって最良の自然とは、何よりも人間の手がまったく加わっていない

自然だったのである。

このような考え方が西欧的な自然観、すなわち、自然を人間と対立させて考える二元論的な自然観にもとづいていることは明らかであろう。人間は、外的な対象である自然に働きかけるが、そうした働きかけが十分に考慮された意図的なものでなければ、それは自然の改悪となる。理想的な自然を人為の関与からもっとも遠くにおくこのような考え方に立てば、自然と人為の峻別が当然のことになり、両者の肯定的な相互作用を認めることは困難になる。長い間の人間の非意図的な営みを通して自然が維持されてきたとか、いっけん自然のままに見える素晴らしい景観に人為の足跡を認めること自体が難しくなる。

二元論的な考え方によれば、たとえば人間が熱帯雨林の中でさまざまな活動をする、あるいは単にそこに居住するというだけで、生態系に悪影響が及ぶということになる。そうした悪影響が幸いにも顕在化しなかったのは、単にこれまでは人口密度が低くて、資源や環境アフリカ森林帯狩猟採集民の生態と自然観に対する利用圧力が低かっただけのことだ。しかし、今や状況は一変している。急激な人口増加や消費経済の浸透によって、そうした人間活動の害悪が一挙に露呈している。それが世界各地において、森林破壊や資源の涸渇の問題となってあらわれているというわけである。

このように人間活動のネガティブな側面ばかりに注目すれば、自然の保護と利用を峻別することがいかにも妥当な解決法のようにみえる。すなわち、一方ではワイルドライフ・サンクチュアリ（野生の楽園）を設けて、そこでは文字どおり、一切の人間活動を排除する。他方では、それ以外の地域を開発地域として、そこでさまざまな開発計画を推進するというものである。この方法は、両者の間に緩衝地帯を設けるなどの調整が施された上で、実際に多くの国で試みられている。

しかし、土地利用や資源利用をこのように峻別したら、将来の地域の景観はどうなるのか。おそらく、保護地域と開発地域ではまるで異なったものになり、景観の二極化がもたらされるであろう。世界各地で森林がどんどん破壊されており、その対策を緊急に講じなければならないという。そうした現状を考えれば、ある程度は景観の二極化もやむを得ないことなのかもしれない。しかし、こうした土地利用や景観の二極化がはらむ問題についてははっきりと認識しておく必要がある。すなわちそれは、環境破壊を生み出す原動力となった西欧近代の二元論（自然と文化の二項対立）を、「自然＝森林保護区」と「文化＝開発地域」として、地域の「景観」において目に見える形で再生産するものである。

私は、これが悪いからやめろ、などというつもりは毛頭ないが、やはりそういう試みがある意味で相対化することが必要ではないと思う。つまりそれは、いま悪玉にされている開発と同様に、「近代という同じ穴のむじな」に属するものではないかということである。そういう意味で、近代的な自然と文化の二元論とは対照的な世界に生きる人びとの世界についての知ることの意味のあることではないかと思う。

2. 森の生態系における循環

自然に関する西欧的な思想がどうであれ、実際には、人間は意図的、非意図的にさまざまなレベルで環境との相互作用を行っているのであり、とくに意識しなくてもそうした人間の日常活動そのものが環境維持の役割を果たすことがある。自然と人間を隔離して考えるのではなく、両者の相互作用を読むことが必要であろう。

ここでとくに注目したいのは、狩猟採集民の活動と環境との関係である。狩猟採集は一般に、農耕のように大規模な植生除去をとまわず、それだけ環境に対するインパクトが小さいと考え

られている。しかし実際には次の例にみるように、長い間の居住や生業活動などのごくありふれた日常生活を通してさまざまな影響を環境に及ぼしているのである。

われわれはこれまでコンゴ盆地のいわゆるピグミー系の狩猟採集民の生態学的、人類学的な調査を行ってきた。残念ながらそこではまだ、住民が意識的に植生の管理をしているといった例は確認されていない。しかし彼らは、森の中にキャンプをつくり、そこで狩猟採集をおこなっている。また、薪や食料をキャンプ地に集め、消費している。そうした日々の活動自体が、結果的に地域の森林生態系の維持にかかわっている。つまり人間は、意図的であるか否かにかかわらず、地域の生態系の維持に関与しており、そうした行為の積み重ねの上に今日われわれが目にする森林の景観が形成されているのである。このような観点から、ここではまずコンゴ盆地北東部のイトゥリの森のムブティ・ピグミーと森林環境の関係を検討し、森林景観の形成にあずかる人為の影響について考えてみたい。ただしムブティの活動と森林環境の相互関係についてはすでにいくつかの場で論じている (Ichikawa, 1996; 市川, 1998 など) ので、ここでは簡単な素描を行うにとどめたい。

ムブティはさまざまな側面において森と関係を持ち、その資源を利用しているが、そうした関係をもっともよくあらわすのが彼らの植物利用である。彼らは実に多様な方法で森の植物を利用しており、植物抜きには彼らの生活は成り立たないといっても過言ではない。まず、植物は食物として利用される。現在のムブティの食物、とくにエネルギー源となる澱粉食の大半が近くの農耕民から入手する農作物によってまかなわれており、野生植物の占める割合は決して高くはない。しかしそれでも季節になると頻繁に利用される果実や堅果、特有の風味や栄養価の故に好まれている野生植物が少なくなく、合計 100 種以上もの植物が利用されている。次に薬用や矢毒や魚毒に用いられる植物も多く、やはり 100 種近くが利用される。生業道具や装飾、建材などの物質文化の素材として利用されるものはとくに数が多く、これまでに記録されたものだけでも 300 種近くが使われている。彼らの物質文化は、森の中にふんだんにある植物を駆使した文字どおりの森の文化といってもよい。さらに豊猟のための呪薬や、森の動物に由来する病気の治療に用いるもの、あるいは「森の主」が宿る木として保護されている植物など、さまざまな儀礼的意味を担った植物がやはり 150 種以上に達する。これらのほかに、直接は利用されないが、狩猟動物や食用昆虫の餌、蜂蜜の蜜源として、いわば間接的に彼らの生活にとって重要な意味をもつ植物がある。これらすべてを含めれば、その数は膨大なものに達し、この森のほとんどすべての植物が何らかの意味で彼らの生活とかかわりをもつと言ってもよいであろう。このように彼らは森の植物を物質的、精神的に、また直接的、間接的に、多種多様な形で利用している。この意味で彼らの生活と文化は、森のもつ多様性に強く依存しているといってもよい。

一方、このような森の資源が、まさに人間によって利用されることによって、再生産されていることに注目する必要がある。たとえば彼らが利用する食用植物には日光がよく当たる場所で発芽・成長する、いわゆる陽樹が多い。彼らのキャンプ地などでは、下ばえが刈り払われて日当たりがよくなるので、それらの植物の生育の条件が整えられるといえる。また、キャンプ地では、食べ残しの滓や果実の種子が廃棄され、そこからあたらしい植物が芽生える。実際、キャンプの周囲を歩いてみると、あちこちにそうして芽生えた実生を見ることができる。甘い果実をつける植物の実には、果肉と種子が離れにくいものが多く、それらは種ごと呑み込まれる。そのようにして、人間や動物の消化管を通して排泄されることによって発芽が促進されるような植物もある。

さらに、キャンプ地には、森の中の広い範囲から薪や食物が集められる。それらが燃やされたり、食べられたりした後で、灰や糞便、ゴミとなってキャンプ地周辺に捨てられる。そうした廃

棄物や排泄物によって周辺の土壌が肥沃になるという効果も考えられる。植物が、燃料や食物の形で土壌から吸収した窒素やリン、カリウム等の物質（土壌養分）のかなりの部分が、人間の消費を介してふたたび土壌に還元されるのである。それがどのくらいの量になるのか、定量的に抑えた研究はあまりないが、たとえば、薪だけでも、一世帯平均一日に 10 から 15 kg を使うので、10 世帯程の集団（キャンプの平均サイズ）が 2 ヶ月に消費する量は、6 t から 9 t にも達する。それだけの量が狭い範囲で燃やされるわけである。あるいは、燃やされないでそのまま土に還元されるものもある。薪のほかにも、食物の残りがすや人間の排泄物として土壌に還元されるものも相当な量にのぼるであろう。

考古学者の西田（1997）は、縄文時代の狩猟採取民が 25 人で 1 年間に消費する食料と薪の中には、400 kg の窒素と 200 kg のリン、70 kg のカリウム、そして 110 kg のカルシウムが含まれており、これらを総計するとだいたい毎年 10 t の栗を産出する栗園に使われている肥料に相当すると言っている。私の試算でも、たとえばムブティの 50 人くらいの集団（バンド）が 1 ヶ月くらいキャンプにいと、それだけで、たとえば窒素だけでも、だいたい硫酸 200 kg から 400 kg に相当する栄養分が、ゴミや排泄物などによって周辺の土壌に還元されていると推定された。

すなわち、森の中で植物が土壌から吸い上げた物質は、人間によって燃料や食物などの有用資源として採取され、キャンプ地に集積される。そこで消費され、廃棄されることによって再び土壌に還元されているわけである。熱帯雨林の土壌はきわめて貧弱だといわれるが、その中でこうした人間を介した物質循環が目すべき役割を果たしている。人間の居住や活動は、自然状態では稀薄にしか分布しない土壌養分等を広い範囲から集めて局所的に集中させているのである。しかも彼らは、頻繁に居住地を変えて移動することによって、そのような土壌養分の集積地を森の中のあちこちに形成しているといえよう。

このようにムブティは、単に森の産物に依存するだけでなく、それらの再生産の条件をも整えていることになる。いいかえれば彼らの生活は、森の資源を含む生態系の大きな循環システムの中にある。ここには、森と人の共存世界が成立しているといってもよいであろう。このような相互依存関係の正確な把握には、植物に対してどの程度の採集圧があり、また人為によるこのような環境改善効果がどの程度のものかということに関するさらに詳しい定量的な評価が不可欠であるが、とりあえずはこれを、人間と環境との共存関係を示すひとつのモデルとしておきたい。

森の民の自然観

1. 「生命のプール」としての森のイメージ

森の生態において確認されたこのような「循環」は、彼らの文化や世界観の中でどのように描かれているのか。森の民の自然観を検討すると、それが彼らの住む森の仕組みや森との交渉のあり方と通底していることがわかる。

彼らはまず、科学者や行政官等のように、自然を人間と切り離された客観的な対象とはみていない。森と人間の世界は往き来の可能な連続的な世界と考えられている。彼らの自然観には、人間もまた、森という大きな循環システムの一部であることが表現されている。

深い森の中に開かれた彼らのキャンプでは、こんもりとした樹冠が頭上を覆っている。そこにいと、すべてを包み込む優しい空間の中に身を置いているような不思議な安堵感がおとずれる。森の民ムブティは、このような森の中の世界を子宮（ムブティの言葉で ebobo）のイメージで捉えている（Turnbull, 1965）。彼らにとって森の中は、母の胎内のように安寧を保証してくれる空間であり、同時にまた人間がそこから生まれ出てきたところというわけである。

その一方で、森は死者の住む世界とも考えられている。通常、ムブティは死者が出ると、キャンプの背後の森の中に深い穴を掘って遺体を埋葬する。それから何日か、頭を剃って喪に服するのであるが、その間に毎日、何回も一斉に儀礼的な泣き声をあげ、夜になると歌と踊りのパフォーマンスを演じて死者を送り出す準備をする。ムブティは、死について、人間は死ぬと、その体は土に残るが、死者の「その人自身」は森の奥深くに入っていくと語る。「その人自身」とは、この地方の地域共通語であるキングワナ語で *mwenyewe* と呼ばれるが、強いてムブティに尋ねると、それは *keti* (霊) だと言う。*keti* は、精霊その他、キリストの神以外の霊的存在の総称であり、地域共通語のキングワナ語ではサタン (*satani*) の名が当てられている。とくに祖霊 (*ancestor spirit*) を示すものは、ムブティの言葉で *keti o kpa*, すなわち「人の霊」と言う。いずれにせよ、森は人間が死後に赴くことになっている世界である。

ムブティの個人名の命名法として *wai* (キングワナ語では *majina*) と称する習慣がある。これは、子供が産まれると自分の祖父母や父母、叔父・叔母、兄弟姉妹などの名を与える習慣であるが、死者の名が選ばれて与えられることも多い。彼らによれば、「死んだ祖先が、再びこの世に出たいと思っている」からだということであるが、このような場合、死者がふたたびこの世に戻ってくるとされ、死者の本名だけでなく、生前の行動や性癖に由来するその人の「あだ名」のすべてがその子供に引き継がれる。つまり、森の死者の世界は、次の出番を待つ人のプールになっているわけで、ちょうど、森の地中で種子が発芽を待っている状態に相当するといってもよからう。

しかし死者の世界である森は、単に生者が忌避するおそろしい世界というわけではない。森の中で、ムブティはしばしば、亡くなった死者と遭遇する。多くの場合、森の中でみる夢を通じての出会いであるが、なかには白昼そうした経験をもつこともある。

ムブティの音楽的才能は、古くエジプト古代王朝の時代から「神の踊り子」として知られるほど有名であった。濃密なポリフォニーによって構成された彼らの歌や踊りは、生命感にあふれており、それを聞く者、見る者に深い感動を与えてきた。そこにはなにか、彼らが日常の意識とは異なる意識状態に支配されているような高揚感があり、ターンプル (1965) や沢田 (Sawada, 1998) のような人類学者は、歌と踊りこそが彼らの宗教的実践の核心をなすものと考えている。とくにムブティの歌の由来を調べてまわった沢田によると、その中には、森の中で祖先から教えてもらったというものが多くという。つまり、森は祖先から、生命やエネルギーの表出 (歌と踊り) についてのインスピレーションを受ける場になっているわけである。

いずれにせよ、森は彼らがそこから出てきた世界 (子宮) であるとともに、死んだらそこに還っていく世界と考えられている。森の生態においては、さまざまな物資がムブティに採取されて人間社会に取り込まれ、そこで消費されることによって、再びまた土と植物に還元されている。ムブティの死生観からは、人間もまたそのような循環をすることがうかがわれる。いうならば、森は人間をも含めた生命の大きなプールであり、そこから人間やさまざまな生物が生まれ、そしてまたそこへ還ってゆく。彼らは、そういうふうにして森と人間世界がつながっていると考え

2. 森とのコミュニケーションとしての狩猟

ムブティの狩猟採集がさまざまな生活物資を得るための生計活動であることはいうまでもないが、同時にそれは、この森とのつながりを確認し、活性化するものである。たとえばムブティは、象狩りなどの大きな狩猟に入る前には、森の中にいる精霊を呼び寄せて、モリモ (*molimo* = 男性結社が森の精霊を招いておこなう儀礼パフォーマンス) やアマバケティ (*amabaketi* = 精霊の歌)、あるいはブトゥーマ (*butuma* = 象狩りの歌) と称する歌と踊りをとまなうパフォーマン

スを演じる。とくにブトゥーマでは、象が追いつめられ、倒されるシーンなど、あらかじめ象狩りの成功を先取りするようなパフォーマンスが演じられる。

あるいは、共同的なネット・ハンティングに出るときには、先に一人がキャンプを出て獵場の近くで火を熾す。全員がそこに集結してから獵が始まるわけであるが、それを待つあいだに枯木や生木が焚かれて、あたりには煙がたちこめる。獵の開始にともなう儀礼ともいべきこの火はクンギヤ (kungya) と呼ばれるが、それは会話する (談笑する) という意味である。つまりこの儀礼は、火を焚くことを通して「森と語らいあう」、つまり「森とコミュニケーションする」ことを意図しているといえよう。

クンギヤの焚火では、とくに森から集めた生木の植物を燻す。生木からたちこめる煙にあたることによって、石鹸や衣服の匂いなど、外界のにおいを消すのだという。つまりそれは、彼らを森と区別がつかないように、森の世界に同化させるのである。植物を焼いた炭や灰を顔に塗りつけたりもするが、これも顔に塗る炭も煙と同様に、彼らの姿が見えないようにする効果があるという。

このようにムブティは、狩猟にあたって、さまざまな方法によって森と人間がつながる回路を確保しようとする。あるいは、森の植物の煙をあてたり、その炭を体に塗ったり、擦り込んだりして、森の世界と見分けがつかないようにする。そのようにして森と連続化、あるいは同化することが狩猟の成功につながるといえるわけである。そして逆に、獲物が捕れないときには、「森が黙ってしまった」あるいは「閉じてしまった」と表現する。そういうときには激しい歌と踊りで森の主 (Apakumandura) に「呼びかけて」、森がふたたび「開いたり」、「熾きたり」するのを待つのである。

こういうふうにとみると、彼らにとっての狩猟というのは、単に動物を獲るということだけではなく、森と交感したり、コミュニケーションする。あるいはそういう形で森とそこにおける自分たちの存在を認識する場でもある。彼らにとって狩猟の成功とは、このような森との交感がうまくいくことの物質的な表現だといえよう。

3. 森に対する信頼感

森と人間社会との連続性は、森に対する呼称にもあらわれており、ムブティは、親族名称を使って森を呼びかける。人類学者のターンブル (Turnbull, 1965) によると、ムブティは森を父あるいは母と呼ぶ。彼らは、森の子供「bamiki ba ndura (children of the forest)」というわけである。私自身は、彼らが実際に森に対して「父、母」と呼びかけることを観察したわけではないが、そういうふうと呼ぶことは十分にありえると思う。実際ムブティは、「父」または「母」に由来するapa-あるいはama-という接頭辞をつけて森のさまざまな現象や事物に呼びかけることが多いのである。森を「父母」と呼ぶことは、何らかの意味で森を「父母」と同質の存在と捉えていることを意味する。それはおそらく、森に対する信頼感をあらわすものであろう。すなわち彼らにとって森は、父母のように彼らを保護し、食物をはじめ、さまざまな必要物を与えてくれる存在である。

いうならばここには、森の持続性と大きさに対する信頼があるといえよう。実際彼らは、森の資源の涸渇ということをあまり考えない。最近では、この地域でも自然保護運動が盛んになり、その中で「教育」されて、そういうことを言い出す者もいるが、そもそも森を「保護」という観念ほど彼らにとってなじみにくいものはないといってよい。むしろ彼らにとっては、森に「保護」されているのは自分たちであり、動物がいなくなれば、それは、どこかほかのところへいっただけのことである。あるいは、「森の主」(Apakumandura) によって森が閉じられてい

るだけのことである。

最近、この地域では砂金採集が盛んになり、よその地域からぞくぞくと人間が流入している。最初に調査した 1970 年代の中頃と比べても、人口は数倍に膨れ上がった。人口増加と過剰採取による資源の涸渇が懸念されるところであるが、しかしこれに対してもムブティは、「森は大きいから大丈夫」とあまり動じる様子はない。たとえていえば、彼らは森に対して、非常に優良な大銀行に対する信頼観のようなものを抱いていて、いつでも必要な金は引き出せるから、慌てる必要はないと思っているかのようである。ちなみに、アフリカのカラハリ砂漠に住むブッシュマンも自然の恵みに対しては同様の信頼を抱いている。かつて彼らが農耕を奨励されたときに、「有り余るほどのモンゴンゴ・ナツツ（野生の木の実）があるのに、どうしてわざわざ種をまかなければならないのか」と言ったというが（Lee, 1979）、それも自然の豊かさとその持続性に対する信頼の表現といえよう。

4. 森のもつ両義性

しかしそれでは、森は人間にとっていいものばかりを惜しみなく与えてくれるところかというところばかりではない。森は、人間にとってネガティブな価値の源でもある。たとえば森の動物は貴重な食料源となるものであるが、同時にそれらが病気や不幸などのさまざまな害悪の源にもなる。たとえば、小型のダイカーの一種ベイツアンテロープやマンガースなどのように、妊婦や幼児をもつ親には子どもに熱病をもたらすとして忌避される動物の肉があり、それらを食べるとその子供に病気などの障害が現れるといわれる。この種の「悪い動物」はクエリ（kuweri）と呼ばれているが、食用にされる動物種（ほ乳類）の実に 6 割にも及んでいる（Ichikawa, 1987）。

このように、病気をもたらす悪い動物として食べることが忌避されるものは、胎児の頃から始まり、誕生の直後にもっとも多く、大人になると徐々に少なくなる。（胎児や新生児の頃は、親が子どものために忌避する。大人は、自分の子供のためにそうした悪い食物を回避する必要がある）。つまりごく一般的にいうと、そういう病気をもたらす「悪い動物」に対する抵抗力は、成長するとともに強くなる。だから、ムブティの母親は自分の子供に食物を与えるときに、それが子供に害を与えないものかどうか気をつけている。彼女たちは、自分の子がこれまでどんなものを食べたことがあるかよく知っていて、「この子はもうこの動物を食べたことがあるから大丈夫」とか、「この動物はまだ危険だから食べさせられない」等と判断する。以前、ムブティが年齢とともにどれだけの種類の動物を食べていくか、またこうした規制の対象となっている動物がムブティの成長とともにどう変化するのかを調べてみたことがある（Ichikawa, 1993）。それによると、ムブティの子どもは離乳直後まで、すなわち生後数年の間にほとんどの動物種に対する食経験を積んでいくが、そうした過程で、森の動物がもつ邪悪な力にさらされるとともにそれに対抗する力を身につけていくのである。

いずれにせよ、ここでは、ムブティの社会を脅かす病気などの災難の源がやはり森の中にあると考えられていることが注目される。人間を襲う病気や事故などの「不幸」の原因をどう解釈するかという「災因論」は、社会によってまちまちであるが、農耕社会などでは一般に呪術がその説明を提供する。自分が「不幸」にあったのは、誰それに呪われたからだというわけである。これに対してムブティの社会では、呪術や妖術は発達していない。彼らの社会には、同じ社会の他の成員による「呪い」といった観念を生み出すような社会的緊張が少ないことがひとつの原因であろう。つまり、集団の移動や離合集散などの社会的な流動性が高くて、他人に対して呪術を生み出すほどのルサンチマンが蓄積しないというわけである。

しかしこれには、コスモロジー、すなわち人間界の諸現象と森を関係づけるやり方も関係する

と思われる。人間社会における病気などの障害の源を、人間社会の中ではなく森に求める立場は、やはり彼らの生命が森の世界と深くつながっているという認識を示すものといえよう。

5. 自然観の背景にあるもの

最後に、以上のようなムブティの自然観が、単に彼らと森の間の関係のみによって形成されたものではないことに注意しておきたい。冒頭において、個別文化の現象を周辺諸文化やマクロシステムとの関連において検討する必要性を指摘したが、これは自然観のような文化表象についても同様である。この点に関しては機会を改めて論じることにしたいが、さしあたっては、森に価値の源泉をおくムブティの自然観は、それと対照的な農耕民の森林観と比較することによって、その特徴や背景がよりよく理解できることを指摘しておきたい。

イトウリの森のムブティはすでに何世紀も前から、バントゥー系、スーダン系の焼畑農耕民と接触しており、彼らとの間に生態、経済、社会、文化など、生活の諸側面に及ぶ相互関係を形成している。文化的に異なる集団が長年にわたってその差異を維持したままで共存するのには、集団間に「統合」と「分化」という2つの社会的モメントが必要である。イトウリの場合、それは一方では農耕民とムブティの間の物資やサービスの交換や婚姻等を通じた人的交流といった相互依存関係であり、また他方では生業、社会、言語など、さまざまな文化的側面における差異化のメカニズムであった^(注)。彼らの自然観も、このような相互関係を通して形成されたものであろう。

現在の農耕民の村は、森を貫通する主要な街道沿いに並んでいる。村の背後の二次林には彼らの焼畑が開かれており、その奥には広大な密生林が広がっている。村とそれを結ぶ街道はまた、その外に広がるより広い世界、つまり地方の都市やそこにある役所や政府機関、さらには教会や援助組織など、国家や外国につながるさまざまな機関や団体とを結ぶルートでもある。彼らの村は、いうならば森から外部社会に通じる出口に位置し、そこからより広い社会に向かって定位されている。そこから背後の森をみるとときには、もっぱら否定的な価値づけがおこなわれる。すなわち農耕民にとって、森は妖術師の徘徊する世界であり、得体の知れない悪霊の世界として、不用の時はあまり近づきたくない世界である。イトウリの農耕民は自身でも森については熟知しているが、それでも罾猟や河川漁労のために何日も森の奥に入るときには、ムブティを伴って行くことが多い。やはり、「森の専門家」と同行することが、森に入る「正しい」方法であり、いろんな意味で彼らを安心させるのであろう。

これに対してムブティのキャンプは、たいいていそのような街道沿いから1～2キロほど奥に入った畑地と森の境界のあたりに位置している。彼らが徴税人やその他の政府の役人などと直接に接触することは稀で、農耕民を窓口として間接的に外部社会と接触しているにすぎない。そうした彼らにとって森の中は、税金や罰金、徴用など、「村」の世界がもたらすさまざまな煩わしい要求から逃れる避難場所でもあった。いうならば、ムブティのキャンプは森の入り口にあって、森の奥の方に向かって定位されている。

このように街道と森という正反対の方向にむかって定位されている農耕民とムブティでは、森に対する見方が異なるのは当然ともいえよう。すなわちすべての価値の源泉を森に求めるムブティの自然観は、森と反対の方向に定位された農耕民と対照されつつ、文化的差異化のメカニズムを通して醸成されたのであろう。そして、両者の相互関係のうちに胚胎されたそのような差異化が、近代の植民地化及び国家形成の過程に対する両者の異なったかかわり方を通していっそう強化されたものと思われる。植民地国家の成員として早くから国家システムに取り込まれていた農耕民と、そこから逃避して、半ば放任されていたムブティの社会は、それぞれ異なった方向に定位されることになった。それが彼らの自然観にも表れているものと考えられる。

(注) ムブティと農耕民の間には少数ながら通婚関係がある(統合の側面)が、それらは常に一方的で、ムブティの男性と農耕民の女性との結婚は皆無である(分化の側面)。また、両者は文法的には同一の言語を話すか、発音(とくにイントネーション)や若干の語彙には明らかな相違がある。この相違は、両者によって詳細に認知されており、あえて維持されてきたものと考えられる。

引用文献

- Fairhead, J. & Leach, M. 1996. *Misreading the African Landscape*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Hart, J. A. & Hart, T. 1986. The ecological basis of hunter-gatherer subsistence in the Ituri Forest of Zaire. *Human Ecology* 14: 29-55.
- 市川光雄, 1998. 生態史研究へのアプローチ. *地域研究論集* 2: 19-29.
- Ichikawa, M. 1987. Food restrictions of the Mbuti Pygmies. *African Study Monographs, Supplementary Issue*, 6: 97-121.
- , 1993. Diversity and selectivity in the food of the Mbuti hunter-gatherers. In: Hladik, C. M., Hladik, A., Linares, O. F. & Pagezy, H, Semple, A. & Hadly, M., eds., *Tropical Forest: Food and People*, 487-496. Parthenon Publishing, Paris.
- , 1996. The co-existence of man and nature in the central African rain forest. In: Ellen, R. & Fukui, K., eds., *Redefining Nature*, 467-492. Berg Publishers, Oxford.
- 西田正規, 1997. 栽培と農耕, 出現過程の生態学. *霊長類研究* 13(2): 173-181.
- Lee, R. B. 1979. *The Kung San: Men, Women and Work in a Foraging Society*. Cambridge University Press.
- レヴィ=ストロース, C. 1965. (大橋保夫訳, 1976). *野生の思考*, みすず書房.
- Sawada, M. 1998. Encounters with the dead among the Efe and the Balese in the Ituri Forest: Mores and identity shown by the dead. *African Study Monographs, Supplementary Issue* 25: 85-104.
- Turnbull, C. 1965. *Wayward Servants: The Two Worlds of the African Pygmies*. Natural History Press, New York.
- ウォーラーシュタイン, 1974. (川北稔 訳, 1981). *近代世界システム* (, 岩波書店).
- Wilmsen, E. 1986. Historic processes in the political economy of San. *Sprache und Geschichte in Africa* 7(2): 413-423.

Accepted October 15, 1998